

壺飾

や道七御見廻申て、彼臺子を見て、何者かかくしらの事仕たるを散々にいひて、則道七飾直せしなり。道庵次の間に在て、其聲をも聞歴々餘の人も聞て、いかにも咲止に有しに、道庵きかぬ體にもてなせる仕方、松倉豊州其坐に有しとて御物語有り、其時は道七飾尤のやうに思ひし間、其仕方も知給ふべき人にひそかに尋申に、道七は古風の仕形利休道庵は當世様なり、臺子は道の秘傳なれば、道庵人にまらせじとのたくみ、尤心深き事なりとぞ、心構のよしなり。

〔南方録拾遺〕葉茶壺、小座敷にもかざる事あり、大方口切の時の事也、初入にかけ物かけて前にかざるべし、小座敷にてのかざりは、口おひひ、口緒までにてよし、自然に長緒などむすぶとも、やすやすと目だぬやうにすべし、さまく世にやかましきむすびかたなど、物まりがほにてあしく、網は凡小座敷にてはかけぬなれども、口切にてなき時は壺によりかくるも不苦。

捨壺といふ事あり、小嶋屋道察に眞壺を求められしに、其比沙汰あるほど見事のつばにて、人々見物の所望ありしに、名もなきつばかざる事いかとて卑下して出されず、ある時客衆常の會の約束にて參られ、腰かけより人を以、今日我等ども參候事第一壺一覽大望ゆへなり、御壺かざられず候は、入まじきよし被申入、道察據なくにじり上りの脇の方に、口覆ばかりしてころがしをきむかひに出られたり、客くぶりをひらきて見るに、脇につばをころがし置たり、床へ御かざり候へと申入しに、道察出て、重々御所望候故出しては候へども、床へ上ぐ可申壺にては候はず、せめて御通りがけにと存捨置候、其ま御覽候へとの挨拶也、まかれどもいづくたびも斷にて、つるは一覽の後、床にかざられしと也、この壺則小嶋屋の時雨と後には名を得たり、この所作を人感じ、捨壺とてはやりたる事也、宗易云、尤時にとりては、左様のはたらきもあるべき事なれども、只所望の上壺を出すほどならば、床にかざりたらんは、おとなしき所作なるべし、捨壺むつかしき事也、勿論又まねてなどすべき事にあらすと云々、